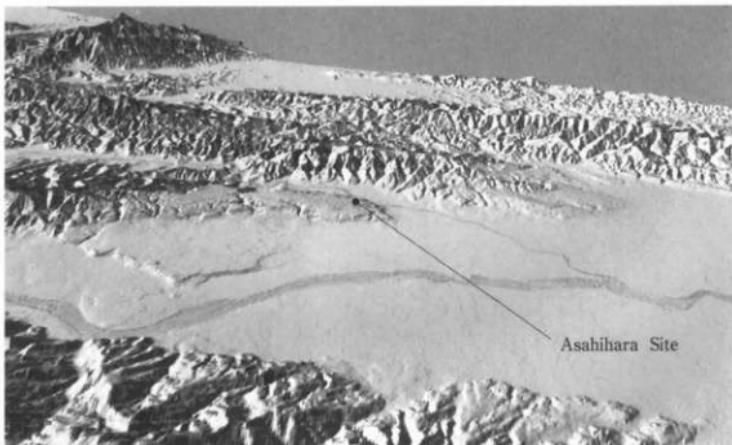


# 朝日原遺跡

2004

新潟県三島郡越路町教育委員会

# 朝日原遺跡



2004

新潟県三島郡越路町教育委員会

## 序

このたび、帝國石油株式会社長岡鉱場越路原プラント拡張工事に伴い、越路町教育委員会が実施した「朝日原遺跡」の発掘調査が完了いたしましたので、調査報告書としてまとめ発刊することとしました。

朝日原遺跡を有する朝日原・越路原段丘は舌状に発達した台地であり、その広がりは南北で約6km、東西は小千谷市にまたがって約1.5kmである。標高は今回の調査地点で約100m、越路原南端の山裾では200mを越えている。また、台地の西を流れる渋海川川床からは約70~100mである。

この広大で平坦な段丘面は古くから周辺の村々に住む農家の大切な畑地であった。よく肥えた土と、高原の風通しのよい畑は、葉菜類をはじめ根菜類など、作物の非常によくできる畑であった。ソバや小麦、粟や大豆などの穀物も盛んに栽培されていて、ここで耕作を行っていた農家は岩田集落の149戸を筆頭に、来迎寺の137戸、十樂寺の79戸など、合わせて500戸を越えていた。

昭和30年代に入り、農業機械が導入されるようになると米作への要望が高まり、昭和38年「越路原に水田を作ろう」との考えがまとまり、町や県に要望して昭和39年には揚水機場の建設に着手された。翌40年からは水田を作る工事が開始され、昭和41年にはすべての工事が完了して広々とした灌作地帯に変身した。

遺跡はほとんどがこの段丘の北端部に集中して分布している。上並松遺跡・下並松遺跡・中山遺跡・朝日遺跡、そして朝日原遺跡などであるが、段丘面の先端部や縁部の段丘崖や沢に豊かな湧水が点在しているので、先人たちがこれを生活に取り込んで暮らしていたものと思われる。この良質な湧水は、現在も生きつづけて銘酒「朝日山」の大切な源泉として活用されている。

朝日原遺跡を含めた権ヶ沢周辺は、昔から耕した土の中から土器片や石鏡や石斧などが出土して、爱好者たちがさかんに蒐集をしたといわれる。蒐集者の中には素人の城をはるかに越え、研究を深めた者も何人かおられたように聞いている。

今回の調査で出土した土器は、縄文中期初頭から晩期中葉のものである。石器については磨石類・石皿類が多く残されていたことが特徴である。

また、越路原一帯の地下は東洋一ともいわれる天然ガスが眠る宝庫でもある。採掘技術の進歩によって、現在は深さ5,000mを越える地下からも採掘が可能となり、日産数十万m<sup>3</sup>の生産を誇っている。この豊富な天然ガスの有効利用を考え、現プラントに隣接して発電機場の建設計画が持ち上がり、今回の調査となつたものである。縄文の古代人が菅々として暮らしをたてていたこの地に、時代の最先端を行く科学力が加わると思うと感慨深い。

本調査に当って、発掘に従事された発掘作業員・調査補助員・整理作業員の皆さま、数々のご教示・ご指導・ご協力をいただいた帝國石油株式会社・県教育庁文化行政課をはじめ多くの方々に心よりお礼を申し上げます。

平成16年3月

越路町教育委員会

教育長 丸山 武士

## 例　　言

1. 本書は、新潟県三島郡越路町大字朝日字原187番地ほか1筆に所在する朝日原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、帝国石油㈱長岡鉱場越路原プラント拡張工事に伴うものであり、越路町教育委員会が実施した。
3. 調査に要した経費は、遺跡確認試掘調査については越路町教育委員会（文化財保護部局）が、本発掘調査については原因者である帝国石油株式会社が、それぞれ負担した。
4. 遺物の註記は、遺跡略号（AH）と調査年度（03）とを組み合わせた「AH03」に統一して遺物番号を記入した。
5. 遺構番号は、土坑略号Pの後に通し番号を記した。
6. 遺構平面図は写真測量で作成した。
7. 本書は本文と巻末図版（図版・写真図版）とで構成される。
8. 本書の執筆・編集は調査担当が行った。
9. 文中の注釈は章ないし節ごとの脚注とし、引用がある場合はここに出典を示した。
10. トピラに掲載した地図は、杉本智彦氏作成の3D地図ナビゲータ「カシミール3D」を使用し、国土地理院発行「数値地図50mメッシュ（標高）日本II」を加工して作成した。
11. 本報告書の内容は先行する全ての報告・記載に優先する。
12. 調査の体制は以下の通りである。

（平成14年度：遺跡確認試掘調査）

調査主体	越路町教育委員会	教育長	丸山武士
事務局	越路町教育委員会	田中正明（事務局長）	
調査担当		山本勝（社会教育係 係長）	
発掘作業員	石原武・小川利雄・川上一・杵淵正栄・桑原正治・小林利夫・小林隆二・佐藤勇・佐藤伸夫・白井清一・高橋修・星野信二・増田省二・渡辺輝男	新田康則（社会教育係 主事）	

（平成15年度：本発掘調査）

調査主体	越路町教育委員会	教育長	丸山武士
事務局	越路町教育委員会	田中正明（事務局長）	
調査担当		小野塙了（社会教育係 係長）	
調査補助員	荒川紀子・丸山京子	新田康則（社会教育係 主事）	
発掘作業員	金子正男・佐藤桂子・岡めぐみ・平沢新一・平沢タズ・目崎力一・横山勝次		
整理作業員	白井綾子・丸山祐美子		

13. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なる御教示・御協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。（あいうえお順、敬称略）

池田淳子・石坂圭介・小熊博史・神林昭一・倉石広太・國島聰・佐藤雅一・鈴木徳雄  
田中耕作・寺崎裕助・徳澤啓一・長澤展生・宮内信雄・宮尾亨・吉荒千春・渡辺裕之  
小国町教育委員会・有限会社オフィスアールアンドピー・越路地計有限会社・  
越路町高齢者就業センター・帝国石油株式会社長岡鉱場・株式会社水井工業・水井歯科医院・  
新潟県教育庁文化行政課・新潟県立歴史博物館・有限会社ベンタラボ

# 目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境	2
第1節 遺跡の位置	2
第2節 周辺の遺跡	2
第Ⅲ章 調査の方法と経過	4
第1節 遺跡確認試掘調査	4
第2節 本発掘調査	6
第Ⅳ章 調査の成果	8
第1節 遺跡の概要	8
第2節 調査区の堆積状況	8
第3節 遺構と遺物分布	8
第4節 遺物	9
第Ⅴ章 まとめ	16

## 挿図・表目次

第1図 周辺遺跡の分布と動態	3
第2図 試掘トレンチの配置と遺構・遺物の確認状況	5
第3図 グリット設定図	7
第4図 西側調査区 遺構・遺物分布図	12
第5図 東側調査区 遺構・遺物分布図	13
第6図 朝日遺跡を取り巻く晩期中葉の遺跡群と周辺地域における遺跡の関係性	17
第1表 作業行程表	7
第2表 遺物観察表	14

# 第Ⅰ章 調査に至る経緯

平成14年3月、帝国石油株式会社長岡鉱場（以下、帝石長岡鉱場と略称）から、越路町役場町民課資産税係に対し、越路原プラント拡張工事計画が報告された。その事業内容は、プラント西側の用地約27,000m<sup>2</sup>を取得して、天然ガス処理施設を増設するというものであった。3月12日に町役場の関係担当部局と帝石長岡鉱場を交えての協議が行われた。

越路町教育委員会（以下、町教委と略称）は、現在のプラント用地内で確認された周知の中山遺跡、そして上並松遺跡や下並松遺跡といった縄文時代後期～晩期の遺跡群が「椎ヶ沢」を囲むように所在するという立地傾向<sup>1)</sup>から判断して、開発予定地が単に周知遺跡の隣接地であること以上に遺跡包蔵地である可能性を示していると推測し、遺跡確認試掘調査（以下、試掘調査と略称）が必要である旨を回答した。そして、調査の詳細は、まず用地内の畜舎跡解体工事に対する立会調査を行ない、その状況を踏まえて協議することとなった。

立会い調査は4月22日～5月10日にかけて実施し、トレンチ壁面で遺構断面を検出した。遺物の出土がなかったため帰属時期は不明であったが、開発区域に遺跡包蔵地が含まれていることが判明した。

この結果を踏まえて、帝石長岡鉱場と町教委の二者による協議が行われ、試掘調査を実施して、遺跡の範囲や状態を確認し、その上で整地方法や施設レイアウトなどを検討することなどが取り決められた。

町教委は平成14年8月22日付越教363号で文化財保護法第58条の2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘の報告」を新潟県教育庁文化行政課長に提出し、8月26日～9月20日の日程で試掘調査を実施した<sup>2)</sup>。調査対象区域は、昭和43年からの土地改良工事により、広範囲に亘り黒ボク土層ないしローム層上面まで削平されていたが、縄文時代の遺物包含層が部分的に残存していた。遺跡は縄文時代の小規模な遺物分布と、帰属時期不明土坑の散在的な分布とが、重ならずに位置している状況であった。

町教委は当該区域を「朝日原遺跡」<sup>3)</sup>として周知化する手続きを取り<sup>4)</sup>、遺跡の現状保存を図るべく帝石長岡鉱場と協議を重ねた。その結果、敷地造成は基本的に盛土工法で行われるもの、調整池設置箇所については削平を免れること、また、今回遺跡が現状保存される範囲についても、将来的に施設が増設され、発掘調査の必要性が生じる可能性があること、以上2点により、埋蔵文化財保護の見地において必要と判断された約275m<sup>2</sup>を対象とする本発掘調査の実施が避けられないという方向性が示された。

翌年帝国石油株式会社から平成15年5月13日付新鉱長事第51号で文化財保護法第57条の2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘の届出」が、越路町教育委員会教育長から新潟県教育委員会教育長への進達<sup>5)</sup>を経て提出された。これに対し、平成15年5月20日付越教第247号で、県教委教育長から町教委教育長宛に工事着手前に発掘調査を実施するよう通知があった。これを受けて、本発掘調査に向けての本格的な協議が開始され、対象面積を約275m<sup>2</sup>、平成15年度中に調査から報告書刊行までを行う工程案で両者が合意し、帝国石油株式会社を甲、越路町を乙とする業務委託契約を7月1日に締結した。

1) 「第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の遺跡」を参照されたい。

2) 実働日数8日間。

3) 遺跡が越路町大字朝日字原寺内に所在することに由来する。

4) 平成14年11月21日付越教第470号「新遺跡の発見について（通知）」

5) 平成15年5月14日付越教231号「埋蔵文化財の発掘について」

## 第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

### 第1節 遺跡の位置（第1図）

朝日原遺跡は、「越路段丘」のうち、越路原Ⅰ段丘に所在する。信濃川中流域、十日町盆地から新潟平野南西部にかけての地域は、更新世中期以降の河岸段丘群が非常に発達していることで知られているが、その中でも「越路段丘」を含む小千谷越路地域は、最も地形変動が激しい地域だとされている。

越路町域を東西に分断するかのように位置する「越路原」は、信濃川左岸に形成された6面の河岸段丘のうち、越路原Ⅰ段丘・越路原Ⅱ段丘・越路原Ⅲ段丘の総称である<sup>1)</sup>。越路原北側の先端部付近には、南北方向に開析谷が走っている。遺跡は、「権ヶ沢」と呼ばれる、この大きな谷の西側に位置しており、信濃川の現河道から直線で約3600m・濱海川の現河道から同じく約700mの位置にある。

### 第2節 周辺の遺跡（第1図<sup>2)</sup>）

以下では、縄文時代に位置づけられる周辺の遺跡について概観したい。これらの遺跡は、時間的にはほぼ中期から晩期までの時期に極まる一方で、空間的には「越路原」と、その東側に広がる段丘面に分けることが可能である。遺跡の立地からは、前者が山林野、後者が河川やその周辺の低湿地帯を視野に入れた活動痕跡である要素が強いものと推測される。

「越路原」の遺跡 北側の先端部や段丘崖付近など、段丘の縁辺部に遺跡が分布している。この様な分布傾向は、先人たちが段丘縁辺部に点在する湧水地を積極的に利用していたことの証左であろう<sup>3)</sup>。しかし、昭和40年代の大規模な土地改良によって作り出された、「みせかけの分布」である可能性も高い。

前述した通り<sup>4)</sup>、「越路原」の北側先端部付近では、権ヶ沢を取り囲むようにして中山遺跡（前期前業～弥生時代）・上並松遺跡（中期末～後期）・下並松遺跡（晩期）が立地する。ここからやや離れた地点に、中期～晩期の集落跡である朝日遺跡が、そして段丘東側の開析谷付近には、婆々懐遺跡（中期～後期）・保沢遺跡（中期～晩期）が確認されている。

「越路原」東側の遺跡 「越路原」の東側に広がる段丘面にも縄文時代の遺跡が点在している。多賀屋敷遺跡（中期～後期）は、信濃川と須川に挟まれた浦段丘面上に位置する集落跡であり、須川の氾濫原を臨むように立地していたと推測される。また、十二割架道橋下遺跡は、来迎寺面に位置する遺跡であり、地下約3.6mの泥炭層中から後期後業の小形壺が単体で発見されている。

小栗田原面に目をむけると、段丘上の微高地に遺跡が集中している状況が看取される。この傾向は、特に現在の片貝町から池津にかけての範囲に顕著であり、延命寺遺跡（中～後期）・沼田遺跡（中期）・前原遺跡（後期）・寺社裏遺跡（中～後期）・池津遺跡（中～後期）などが確認されている。また、町裏遺跡（晩期）もこの範囲内に位置しているものの、低湿地に立地しており、漆器などが出土している。

1) 地図標記からみると、「越路原」は北側の朝日原と南側の越路原とに分かれているが、通例「越路原（こじっぺら）」と呼び習わされている。以下、括弧付きで標記した場合は、朝日原と越路原を総称した呼称を意味する。

2) 小千谷市域の遺跡分布は、先行する幾つかの文献に示されているが、その位置関係が文献ごとに異なっている。今回の図は、以下に掲げる文献に示された分布図を参考資料とした。

小千谷市教育委員会編 1990 「市内遺跡詳細分布調査報告書」 116-117頁。

3) 柳恒雄 1998 「発達した朝日原・越路原の台地」 越路町編「越路町史」資料編1。14頁。

4) 「第1章 調査に至る経緯」 前掲1頁。



no.	遺跡	前期			中期			後期			晩期			弥生	標高(m)						
		前葉	中葉	後葉		20	40	60	80	100	120	140									
1	朝日			*				*			*			●							
2	立矛													●							
3	下並松																				
4	上並松	*			*	*		*	*		*										
5	中山																				
6	朝日庵				*						*										
7	保沢				*	*															
8	喜々懃				*			*													
9	十二割茅道構下																				
10	多賀屋敷				*	*		*	*		*										
11	延命寺					*		*													
12	町裏																				
13	前原																				
14	沼田																				
15	寺社塚																				
16	池津																				

● 主体 ● 多 ● 少 ● 微 ▲ 詳細時期区分不可

第1図 周辺遺跡の分布と動態 (S=1/35,000)

## 第Ⅲ章 調査の方法と経過

### 第1節 遺跡確認試掘調査（第2図）

**調査の方法** 平成14年8月26日～9月20日の試掘調査では、23本・約1538.2mのトレンチ調査を行った<sup>1)</sup>。試掘調査の対象となった区域の旧地形は、「原」という小字<sup>2)</sup>と現況地形から判断して、権ヶ沢の西側に広がる緩やかな斜面地であったことが予想された。このため旧地形、とりわけ東西軸の微地形把握を射程に入れながら、現況の圃場区画を踏まえつつ、試掘トレンチを設定した。

調査は、0.45m級バックホーと人力掘削を併用して行なった。バックホーでの掘削は表土層（耕土層・盛土層）を対象とし、これより下位の層はジョレンなどを用いた人力作業で面的に掘り下げた。そして、遺物の出土位置情報および遺構図は、簡易やり方実測（S=1/20）で記録した。記録写真の撮影には、キャノンAE-1（レンズ35-70mm）とコニカ現場監督28（レンズ28mm）を併用し、35mmリバーサル・フィルムとカラー・フィルムを使用した。

**調査の概要** 当初の予想に反して、調査対象地の旧地形は比較的起伏に富んだ微地形をもっており、そのため、「越路原総合開発事業」の土地改良工事により大規模な削平を受けていることが判明した。しかし、調査を通して、2本の試掘トレンチ（13・21T）で縄文時代に帰属する遺物を確認するに至った。同時に4本の試掘トレンチ（7・10・13・16T）で土坑を確認したが、遺構上部が削平されていたこと、覆土からの出土遺物が皆無であったことから、帰属時期を断定することはできなかった。

遺物は合計28点出土した。その内訳は縄文土器片18点・石器5点である。これら出土遺物は縄文時代中期初頭および晩期中葉に位置づけることができる。以下、出土トレンチごとにその状況を概観する。

13Tでは、縄文土器12点および石器1点を確認した。出土した土器は、撫糸文土器の一群（網目状撫糸文）と無文土器に分類される。前者はその特徴から縄文時代晩期中葉に位置づけることが可能であり、「越路原」に位置する朝日遺跡に類似を見出せる。一方、無文土器についても、同様に晩期前葉に帰属するものと推測するのがより自然な捉え方であろう<sup>3)</sup>。出土石器はチャート製の碎片1点である。剥片形状や使用石材などの形質的特徴からみて、石器などの製作過程において副次的に生成されたものと推測される。近在地域において石器石材となり得るチャートは採取し難いと考えられていることから、遠隔地からの搬入石材である可能性も視野に入れておきたい。

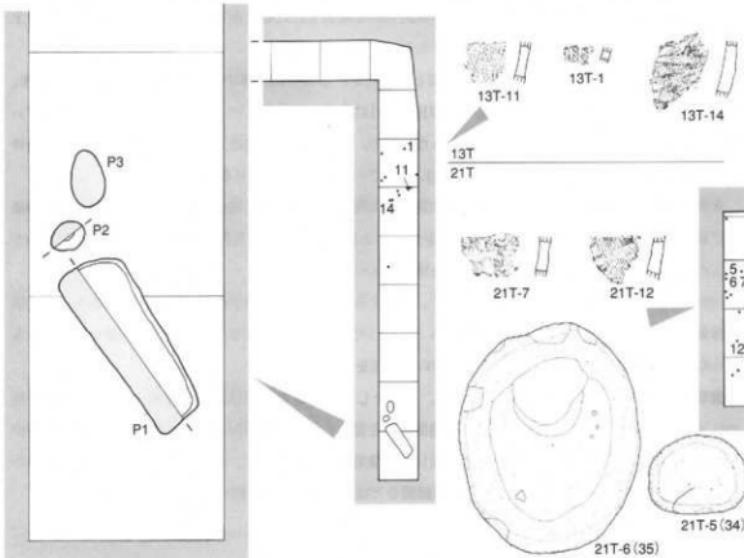
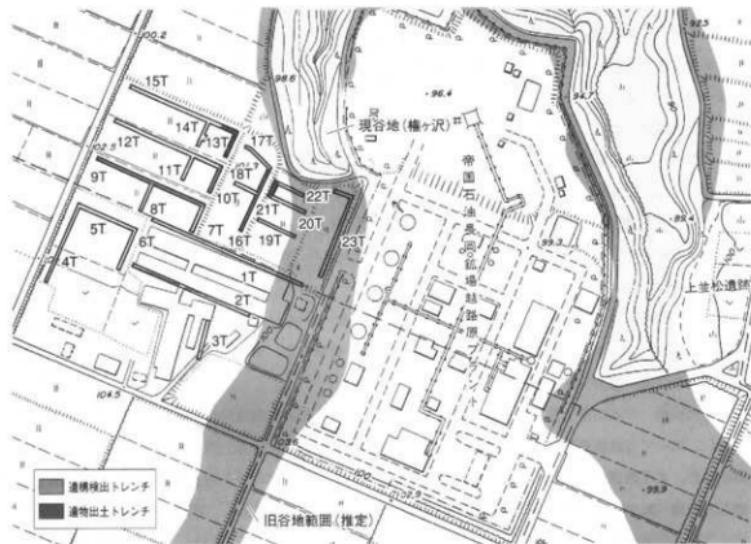
21Tでも、縄文土器6点および石器4点を確認している。出土した土器は撫糸文土器の一群（木目状撫糸文）と縄文土器に分類される。こちらは中期初頭～前葉の所産であろう。また出土石器は石皿と磨石類によって構成されている。

**調査の成果** 以上により、当該区域は土地改良工事の影響を大きく受けているものの、その北側に遺跡包蔵地が残存していることが確認できた。権ヶ沢はより南まで延びており、21Tの遺物出土範囲は谷際に残された活動痕跡であると推測された。全般的に遺構数や遺物量は少ないが、とりわけ石皿と磨石が共伴関係を示すかの様に出土したことは、この地に比較的拠点的な小規模遺跡が残されていた可能性を感じさせた。この評価を下地として埋蔵文化財保護行政上の協議を進めることとなった。

1) これは調査対象面積26987.31m<sup>2</sup>に対し約5.7%にある。

2) ちなみに、隣接する中山遺跡所在地の小字は「上ノ山」である。

3) ただし、植土や器面調整などの特徴から、縄文時代前葉まで溯源の可能性も指摘できる。



第2図 試掘トレンチの配置と遺構・遺物の確認状況 (配図図 S=1/2500・分布図 S=1/200・遺構図 S=1/40 遺物 S=1/4)

## 第2節 本発掘調査（第3図）

**発掘調査の方法** まず、試掘調査の成果と開発計画とを勘案して本発掘調査区を設定した。そして調査の便宜を図るため、現況の圃場区画軸に沿うように、任意の10m方眼グリッド・メッシュを設定した<sup>1)</sup>。グリッドは西から東へ向かうX軸方向にアラビア数字の1～4、北から南へのY軸方向にアルファベットのA～Gとし、両者を組み合わせてグリッド名称とした。これを大グリッドとし、更に2×2 mの小グリッドで25細分した。

バックホーでの掘削は、試掘調査と同様、表土層（耕土層・盛土層）までを対象とした。これより下位の層については、ジョレンなどを用いた入力作業で面的に調査した。

遺物の出土位置情報は簡易やり方実測（S=1/20）で記録した。検出した遺構の平面図は写真測量で、断面図は簡易やり方実測（S=1/10）でそれぞれ作成した。また、調査区の土層図も簡易やり方実測（S=1/20）で作成している。

記録写真的撮影には、キャノンEos-Kiss 5（レンズ28-90-300mm）とコニカ現場監督28（レンズ28mm）を併用し、35mmリバーサル・フィルムとカラー・フィルムを使用した。更に、調査完了後、5mリフトを使用して調査区域の完掘状況などを撮影した。

**調査の経過** 平成15年7月8日、調査区にバックホーを搬入した。14日にバックホーを用いて表土剥ぎを行い、統いて方眼杭を設置した。調査機材の搬入もこの日に行っている。翌15日より、人力での掘削を開始した。まず西側調査区<sup>2)</sup>の調査を先行させて、この地点の遺物包含層を調査し、遺物の出土状況を確認した段階（出土状況写真撮影および遺物分布図作成の状態）から、東側調査区<sup>3)</sup>の調査を並行させた。遺構確認作業を始めたのは8月6日である。検出した遺構は原則的に南北方向で半截し、覆土断面を観察した。これは遺構形状を考慮に入れつつも、地山の傾斜方向を重視したためであり、また調査区南・北壁との土層対比を簡便に行うこと目的としたためである。

14日からお盆休みに入り、調査は一時中断となったが、この時期に集中した台風の影響により、結果、24日までの長い中断期間となった。途中、19日と22日に調査区の養生とポンプでの水抜き作業を行っている。こうして、8月25日から調査再開となったものの、その後の1週間は天候不順が続いた。発掘調査終盤、土層観察を交えながらの諸作業は、天気によって一進一退するという様相をみせた。

9月8日朝より測量写真撮影準備のために調査区の精査を行ない、午後から測量写真を撮影した。測量終了後、調査区の隅に深堀マスを3ヶ所設定した。これは旧石器時代文化層の検出を目的としたものであったが、残念ながら当該期の活動痕跡は発見できなかった。

10日、帝国石油株式会社の御厚意を受けて、隣接する長岡航駅越路原プラントの処理施設から、調査区の遠景写真を撮影した。また、片貝まつりの「昼の三尺」が轟く中、残されていた作業小屋の撤去作業も行った。翌11日に土壤サンプリングなどを行い、調査を完了した。

**整理の方法** 出土遺物は、水洗いした後、註記をした。遺物の註記は、遺跡略号（AH）と調査年度（03）とを組み合わせた「AH03」に統いて遺物番号を記入した。遺物の記録図化に際しては、調査担当が石器実測図、整理作業員が土器拓影図を作成し、土器実測図については、2点（国版5-1・10）を有ペンタラボに委託した。出土遺物・記録写真・記録図などは越路町郷土資料館で保管している。

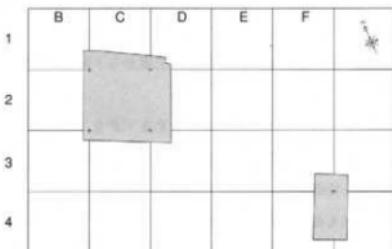
1) このため、グリッドの主軸は真北に対して約245° 西傾している。

2) 試掘調査13Tを拡張したエリア。本調査に際しては、便宜上「A地点」と呼称した。

3) 試掘調査21Tを拡張したエリア。本調査に際しては、便宜上「B地点」と呼称した。



第3図 グリッド設定図  
(上: S=1/2500 左: S=1/800)



第1表 作業工程表

	平成14年												平成15年												平成16年		
	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
事前協議																											
立会調査																											
事前協議(2)																											
試掘調査																											
整理作業																											
事前協議(3)																											
本発掘調査																											
整理作業																											
原稿執筆・図版作成																											

## 第Ⅳ章 調査の成果

### 第1節 遺跡の概要

遺跡は「越路原」の開析谷椎ヶ沢に東面して位置し、本発掘調査によって遺構27基と遺物178点が確認された。遺構と遺物の様相から判断して、遺跡は縄文時代中期初頭から晩期中葉までの小規模かつ短期的な活動痕跡の集積であると見做すことができる。

### 第2節 調査区の堆積状況

調査区域が越路原I段丘の北端付近に位置しており、また、段丘の開析谷（椎ヶ沢）を東に望むという地理条件から、北東方向に向かって傾斜している。つまり、土層の堆積は南北軸において北、東西軸において東が、それぞれ厚くなっている。

今回の本調査区域においては、表土層（耕土層・盛土層）と黄褐色風化火山灰土層との間に、人為的に区分した2枚の黒ボク土層を確認した。この黒ボク土層のうち、上位の暗褐色土層を「第Ⅰ層」、下位の漸移層を「第Ⅱ層」、そして黄褐色風化火山灰土層を「第Ⅲ層」と呼称した。遺物の包含が概ね第Ⅰ層に限定されること、調査区界面で断面観察できる遺構はⅡ層上面から掘り込まれていること、などの要素を総合すると、当時の生活面を第Ⅰ層下部～第Ⅱ層上部に推定できる。

### 第3節 遺構と遺物分布（第4図上段・第5図上段 図版1～4）

西側調査区 遺構25基を確認した。分布は調査区全体に及ぶ。検出遺構のうち、P27・P28は被熱による硬化面ないし地床炉であると推測される。特にP27について言及すると、覆土第1層（黒褐色土層）は硬化が極めて顕著であり、加えて鋭い光沢を帯びていたことから、遺構確認当初、炭化物と見誤ったほどであった。覆土第2層（黄褐色土層）は硬化が進んでいる一方で、被熱の影響からか径5～20mmのブロック状にボロボロと崩れる性質をもっていた。また覆土層の硬度は、上層から下層、中心から周縁に向かって漸移的に低くなるという様相を呈していた。

他の土坑23基については用途を断定し得る材料に欠けるが、その中でもP2・P6・P7・P8・P16は、覆土層の堆積状況と土坑形状からみて、柱穴であったと推測できよう。また、P1・P3・P9・P10・P14・P12・P17についても、遺構形状から判断して、柱穴跡だと推測したい。

遺物は、調査区中心付近に集中域をもちらんがらも調査区東側に散漫な平面分布を示す。垂直分布は概ね約20cm幅にまとまっている。東西方向の斜度が約1.7～1.9%であることを考慮に入れると、ほぼ同一レベルに分布していると言える。ただし、遺物の集中域においては最大36.0cmのレベル差があり、これがある時期の地形の窪みを意味するのか、あるいは調査時に検出できなかった皿状遺構の存在を示しているのか、検討の余地を残している。

東側調査区 遺構3基を確認した。遺構分布は調査区の南側にやや偏在する。P24・P25は、覆土層の堆積状況と土坑形状からみて、柱穴であったと推測できよう。

一方、遺物は調査区の北半側に広がりを示す傾向がある。垂直分布は約20～30cmの幅に収まっている。東西方向の斜度が約1.6～2.5%であることを考慮に入れると、西側調査区と同様、ほぼ同一レベルに分布していると言える。

#### 第4節 遺物（第4図下段・第5図下段 図版5～8 写真図版5～7）

縄文土器（図版5） 発掘調査で得られた縄文土器は中期初頭から晩期中葉に帰属する。これらを5つに大別し、以下にその概要を述べたい。

第1群は中期初頭に比定される資料をまとめた（1～9）。木目状撚糸文が施文される一群が主体となる。1は「く」の字に屈曲する口縁部をもつ深鉢であり、北陸系深鉢土器の特徴を色濃く示している。口唇部および口縁部下端（=屈曲部）に格条体が施文されている。口縁部は半截竹管状工具による半隆起線によって区画されており、この口縁部区画帯は1条の山形文によって充填されている<sup>11)</sup>。そして、胴部には木目状撚糸文が施される。口唇部から胴部への【格条体→山形文→格条体→木目状撚糸文】は【縱（短）施文+横施文+縱（短）施文+縱（長）施文】という要素に還元されるため、見附市山崎A遺跡下層土器群などと同じ文様構成であり、併行関係にある資料であると理解することができる。そして「の」字状の立体装飾（突起）が粘土帶貼付として隆化し、C字状に下垂することによって、口縁部区画を構成しているのだろう。この部分には沈線・刻目が施され、「C字」が強調されている。2～4は胴部に木目状撚糸文が施文される一群である。2・3の胎土は1に近似している。4は1～3と比較して細目の撚糸文が施文される。また器表面に炭化物が付着している。5～7は口縁部資料である。5は折り返して肥厚させた口唇部に撚糸文が施文され、口唇部直下には横位区画の沈線が引かれている。6は、口唇部が欠損しているが、口唇部から胴部にかけて撚糸文を施し、口唇部直下に沈線で区画を入れているものと判断できる。7は口縁が外反する資料である。撚糸文を施文し、さらに口唇部に刻み状の密接した斜位の沈線が加飾されている。8は胴部資料である。半截竹管状工具による断面かまぼこ状の半隆起線を使った区画<sup>12)</sup>の中に縄文を充填した後、縦位の半隆起線を描いている。破片の観察からは、この区画が少なくとも3段（条）になることが窺える。また胎土は1～3に近似する色調を呈している。

第2群は中期中葉の土器群である。図示した2点のみ出土している（9～10）。9では半隆起線で区画を描き縦位沈線と押引文を充填している。区画となる半隆起線の内側（内周の沈線）はヘラ状工具で切り出され、断面V字状になっている。10は火焰型土器の口縁部下半資料と推測される。上下端とも輪積み部分できれいに剥がれており、乾燥がかなり進んだ状態で粘土紐が積み上げられたことを物語っている<sup>13)</sup>。施文は主に渦巻文で構成されており、半截竹管状工具でガイド文様を入れた後、それをヘラ状工具でなぞるように描き直している様子が明瞭に残されている。上下2段に配置される渦巻文の間には三叉状の沈線文が充填されている。そして2条沈線と起降帶文による縦位区画が入る。管見の限り、火焰型土器の縦位区画は袋状突起などの立体装飾が配置されることが一般的であり、この資料のもつ大きな特徴であると言えよう。そして、縦位区画の左右で渦巻文がシンメトリーに配置されていないこと、描き直し沈線が太すぎたためか半隆起線の間隔が広くなり、結果、平板な印象をもつ仕上がりとなっていることなど、全体的にバランスを欠いた造形となっている<sup>14)</sup>。

第3群は晩期中葉の土器群である。網目状撚糸文が施される土器と、これに類する無文土器を一括した（11～29）。器厚が厚いものと薄いものとに分けることが可能であり、施文原体と土器胎土などの特徴にも明瞭な相違があるが、両者ともに晩期中葉の「朝日式」の範疇に含まれる資料であろう<sup>15)</sup>。いずれの資料も内面調整が顕著ではない。11～14は厚手の一群である。粗製深鉢の胴部資料であろう。一見粗雑な印象を受けるが、後述する薄手の一群よりも内面調整がしっかりしている。15～29は薄手の一群である。15は口唇部資料である。器表面の状態がやや悪いため断定はできないが、口縁部無文帶資料であり、この下に16の様な横位区画が配置されるのであろう。16は口縁部区画から胴部にかけての資料である。特徴的な綾

縦文を横位に施して口縁部区画とし、胴部には網目状撚糸文が施される。28は底部資料である。底面に不明瞭な葉脈状の痕跡がある。29は口縁部区画から胴部にかけての資料である。16と同様の構成をもつ資料であるが、こちらの胴部施文は縦位の縦文であろう<sup>4)</sup>。

第4群は縦文土器を一括した。30は口縁部資料である。口縁直下からL R 縦文が縦位に施されている。31はR L 縦文が横位に施文される。また内面に炭化物が付着している。

第5群は無文土器を一括した。32は口縁部付近の資料であろう。破片上端部に断面かまぼこ状の半隆起線が確認される。器面の表裏ともに比較的丁寧なナデ調整が施されている。また、器表面には炭化物が付着している。

石器(図版6~8) 試掘調査・本発掘調査あわせて47点出土している。磨石類・石皿類が多く残されていたことが特徴的な傾向であり、それに少量の定形的な石器(打製石斧)と便宜的な石器(いわゆる「不定形石器」)が組み合わされる。しかし、遺物分布の項で述べた通り、出土状況からみて、これら石器を土器型式という時間幅に分離・編年し、有意的な集合としての石器群(assemblage)として、その組成を検討することは不可能ある。そして、もう1つの特徴として転用が顕著であることが挙げられる。磨石類・石皿類において使用後に被熱や炭化物が付着した資料が多く存在し、また打製石斧から楔形石器などへの転用が確認される。以下、石器個々について概述する。

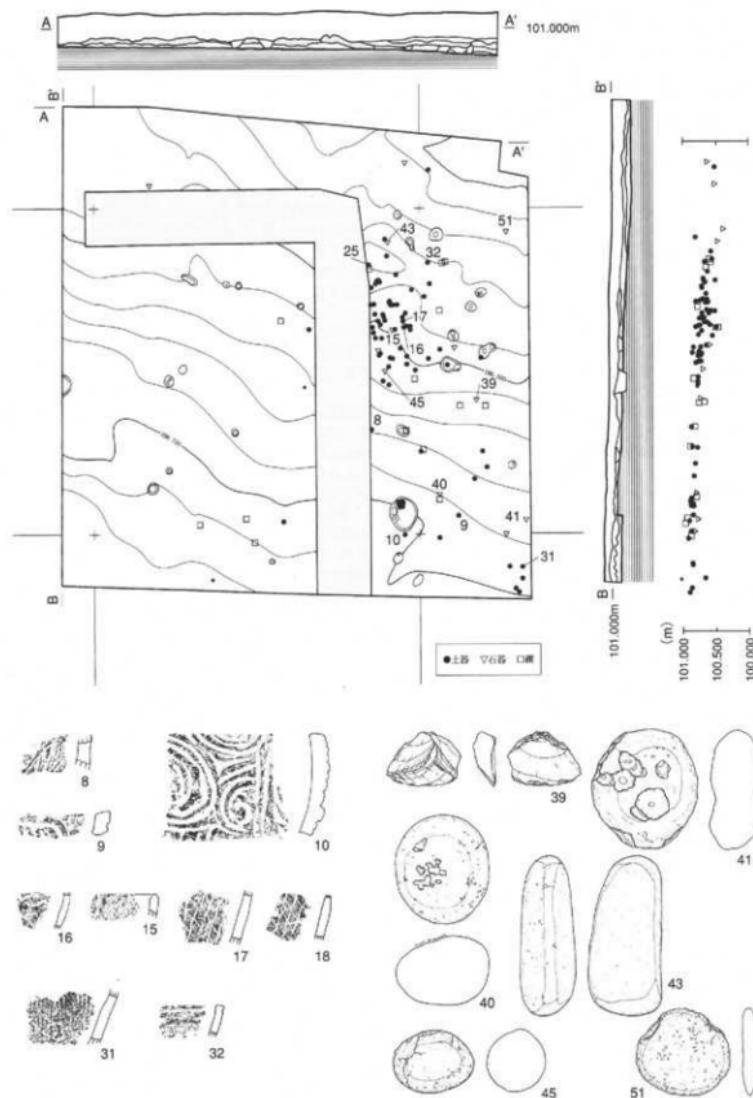
33~35は試掘調査で確認された資料である。33・34は磨石類である。33は石器中央に深い凹痕が、34では石器全面に磨痕が確認できる。35は石皿である。表面の上半部に緩やかな凹みが確認できる。

36~52は本発掘調査で確認された資料である。36は石槍状の形態をもつ石器である。黒色安山岩の縦長剥片を素材としており、特に石器右側は、その素材形状をとどめている。二次加工は左側縁に偏る。裏面に左右両側縁からの平坦な剥離調整を加えた後、裏面から表面に向けて大きな剥離を施している。したがって裏面の二次加工は細部調整であると共に、表面の剥離に対する打面調整であったものと推察できる。先端部は欠損している<sup>5)</sup>。37は楔形石器である。石器上下端には両極打法による剥離が残される。恐らく打製石斧が転用されたものであろう。元となった打製石斧は、泥岩の偏平凧を素材とし、左右両側縁の階段状剥離が施されており、若干の“ツブレ”を確認することができる。38は打製石斧の基部である。黒色安山岩を素材としている。基部資料であるため石器の全体像は不明であるものの、粗く大きな剥離が施されている様子が窺える。ただし、右側縁上部の裏面側に比較的細かな二次加工および微細剥離が集中しており、この部位の使用を想定できよう<sup>6)</sup>。39は二次加工のある剥片である。安山岩の縦長剥片を利用し、剥片下端に連続的な細部調整が施されている。

40~47は磨石類に分類される。このうち40~42は凹痕と磨痕が複合する一群であり<sup>7)</sup>、43~47は磨痕のみ確認される一群である。43はいわゆる「特殊磨石」との類似がみられる。47では石器中央の磨痕が顕著である。48~50は石皿類に分類される。48は安山岩の偏平凧を利用した石皿である。石器の器面は被熱の影響によって激しく剥落しており、更に炭化物などの付着が認められる。49は断面凸レンズ状のやや偏平な安山岩を利用した石皿である。平坦な面には全面に磨耗痕が残されている。凸状面には、炭化物の付着や表面の剥落など、被熱を窺わせるような表面劣化が観察される。50は安山岩を利用した台石であり、偏平な面に敲打痕が、一方凸状面の頂部には磨耗痕が残されている<sup>8)</sup>。前者には炭化物および赤色付着物、後者には炭化物を確認することができた。

51・52は偏平凧端部の二辺に抉り状の剥離が施される石器である。“抉り”が石錐のように対向せず偏在する点が形態上の特徴である。

- 1) 扱小さな区画内に配置されることによって、山形文が交互刺突文の効果を醸成しているかの様な印象がある。
- 2) この半隆起縁の区画は非常に綴やかな弧を描いている。
- 3) つまり、この破片が土器製作における粘土組み上げと乾燥の単位を示している可能性が高い。破片断面の肉眼観察では2本を1帯とする粘土帯が3段積み上げられているように推察された。しかし、水井歯科医院のご厚意により土器片をX線撮影する機会を得て、より詳細な検討が可能となった。得られたX線写真は「至極明瞭」とは言えないが、その観察からは7~10mmの粘土帯がおよそ10本積み上げられている様子が看取され、結果2本1帯の5段積みと推測できた。なおX線写真は写真図版5に掲載している他に、別設定2カット撮影している。
- 4) 宮尾亨(2002)が指摘しているように、火焔型土器に代表される土器の文様は各文様要素群の集積であり、われわれにある土器群を型式(様式)に分類させる何かを生み出している。山内清男は「一定の形態と装飾」(1972)にこの「何か」を見出しており、有名な「型式は実在する」(1939)という言説を残す。また、小林達雄はこの「何かを「零團氣」と呼び、その背景を「範型」に求めた(1989)。
- 「構造」とは一般的に、要素あるいは要素間に横たわる関係性の總体であると考えられているのだから、ここで飛躍的に解釈すれば、「山内は土器に構造を捉えて、我々は縄紋土器を他の上層から鑑別することが出来る。鑑別されたものは、確かに器物としての縄紋土器である」と述べ、そして下位構造である細部型式については分類学的標本を使って把握する方法ゆえに「実在し勘し得ない」ものと規定してであろう。
- この様に考えた場合、破片資料で断片的であるが、10は火焔型土器を火焔型土器としている(=われわれにそう分類させる)構造からやや逸脱した存在である。
- 概論を言えば、ある構造から逸脱しているということは別構造である。ということになる。しかし外国人の使う日本語に良くみられる「助詞抜き言葉」が日本語ではないのか?と言えば、厳密には違うかもしれないけれど話し言葉(口語)としては意味が通じし良いのでは?、という回答が返ってくるように、それもまた分類としての日本語の範囲に入っている。
- 我々が日常生活のなかで強く感じているように、第三者の分類者の分類と、その対象となる者の分類との関係は、当時者が滑稽だと思う程にチグハグである。縄文土器に限らず、考古学的分類もこの域に見し得ないであろう。
- また、この種の構造は抽象的なイメージとして伝達されるから、受け手がその構造をどのように解釈するか、その解釈の仕方やイメージの仕方であって、構造は変形してしまう。しかも変形者(イメージを受け取ってそれを変形させてしまった者)にとってみれば構造は維持されたままである、ということは起こり得る現象である。この点で、文化現象としての「(第三者の視点での)構造の変形」と「構造の読み替え」を峻別していく必要性を痛感する。「世界は言語の似姿」とも表現される言語の指示性を引き合いに出すまでもなく、われわれは分類を通してのみ環境に接するのであるとすると、分類は文化の「型」をついている。そして構造の認知それ自体も文化であると考えた時、縄文土器を記号として、その背後の、「実在のある集団なり社会」を描き出すためには、構造の認知と解釈の問題を乗り越えなければならないであろう。
- 宮尾亨 2002 「火焔土器の文様考」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第3号。15~32頁。
- 小林達雄 1989 「縄文土器の様式と型式・形式」 小林達雄編「縄文土器大綱」4 小学館。248~254頁。
- 山内清男 1939 「日本遠古之文化—輔注付新版」 先史考古学。
- 1972 「縄紋式土器・総論」 山内清男・甲野勇・江坂輝弥「日本原始美術」I 縄紋式土器 講談社。145~183頁。
- 5) 渡辺(2002)が提示した延命寺ヶ原遺跡第3地点出土資料粗製深鉢2d類に含まれる文様構成をもつ。ただし、蛇足ではあるが、近接する朝日遺跡資料および延命寺ヶ原遺跡出土資料を実見したところ、焼成・胎土の遷移・器面調整などにおいて異なる様相をみせている点を指摘しておきたい。
- また、「朝日式」が指⽰するものについては学術的な変遷があるものの、「大洞C1式の精製土器と綾縞文を最大の特徴とする地方色豊かな粗製土器から構成される」という渡辺の要約(2004)に収載されるだろう。更に彼はこの粗製深鉢の一群を「朝日タイプ」と呼ぶことを提唱している。
- 渡辺智之 2002 「『朝日式土器』の再検討—延命寺ヶ原遺跡出土土器の検討をとおして—」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第3号。45~71頁。
- 2004 「新潟における縄文晩期中葉の様相」 谷藤保彦・根岸慎二編「第17回縄文セミナー晩期中葉の再検討—資料集一」縄文セミナーの会。271~301頁。
- 6) 前掲の15~28は接合こそしないものの同一個体であることを想起させる程、その質感が似通っているが、この29はやや異質な質感をもっている。また、縄文施文という観察が正しければ、前掲註3 渡辺分類の粗製深鉢2a類ないし3類に含まれられるであろう。
- 7) 左側縁加工の際、偶発的に破損した可能性を指摘しておく。
- 8) この部位の縁角度は約70°である。この部位が使用されたと想定した場合、些末なことであるが、微細剥離と基部欠損面との新旧が、この石器を解釈する上で大きな意味をもつこととなる。つまり、①前者が古い場合、複合的な機能ないし用途をもつ石器と考えられ、②前者が新しい場合、(a) 欠損後に転用されたものとして考えられ、さらには(b) もともと打製石斧ではなく、このような形状の削片を利⽤した、いわゆる「不定形石器」である可能性も考えられる。したがって、今回はこの石器を打製石斧の基部と分類したが、分類によつては、異なるものとされるケースがあるだろう。
- 9) 特に40については、使用痕の観察からは、磨石から敲石への転用が想定される。
- 10) 憨らく凸状面を接地させて使用したために残された消耗痕であろう。



第4図 西側調査区遺構・遺物分布図（分布図：平面S=1/150・垂直方向S=1/75 遺物S=1/4）



第5図 東側調査区遺構・遺物分布図（分布図：平面S=1/150・垂直方向S=1/75 遺物S=1/2）

第2表-1 洋文土器觀察表(1)

編號	No.	地點	類別	開式	文樣觀察	顏色	形狀			等級			
							外周	直	內				
137-1	試	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃褐10YR7-4	白-灰	黑	白-灰	0.7			
137-2	試	2	朝日式	綱目伏熱赤文	口緣斜坡	白-AV-黃10YR7-4	白-灰	黑	白-灰	0.7			
137-3	試	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-灰	黑	白-灰	0.7			
137-4	試	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-灰	黑	白-灰	0.7			
137-5	試	3	朝日式	綱文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-灰	黑	白-灰	0.6			
137-6	試	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-灰	黑	白-灰	0.6			
137-7	試	3	朝日式	綱文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-灰	黑	白-灰	0.6			
137-8	試	3	朝日式	綱文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-灰	黑	白-灰	0.6			
137-9	試	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-灰	黑	白-灰	0.6			
137-10	試	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-3	白-灰	黑	白-灰	0.7			
137-11	試	3	朝日式	綱文	圓盤	白-AV-黃10YR7-3	白-灰	黑	白-灰	0.7			
137-12	試	3	朝日式	綱文	圓盤	白-AV-黃10YR7-3	白-灰	黑	白-灰	0.7			
137-13	試	3	朝日式	綱文	圓盤	白-AV-黃10YR7-3	白-灰	黑	白-灰	0.7			
137-14	試	3	朝日式	綱文	圓盤	白-AV-黃10YR7-3	白-灰	黑	白-灰	0.7			
217-7	試	1	木臼伏熱赤文	圓盤	標記AV7-6	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6			
217-9	試	1	木臼伏熱赤文	圓盤	標記	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6			
217-10	試	1	木臼伏熱赤文	圓盤	標記	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6			
217-11	試	1	木臼伏熱赤文	圓盤	標記	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6			
217-12	試	1	木臼伏熱赤文	圓盤	標記	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6			
217-13	試	1	木臼伏熱赤文	圓盤	標記	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6			
6	西	4	綱文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	1.0			
11	西	5	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	標記AV7-6	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
12	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	標記	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
14	西	3	朝日式	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
3-20	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	1.0		
17	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
3-22	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-3	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
19	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-3	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
20	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-3	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
21	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-3	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
22	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-3	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
3-19	24	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-3	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
20	西	3	側日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-3	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.7		
26	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
27	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
28	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
3-21	30	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
3-15	32	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
3-26	33	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
34	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
3-18	26	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
37	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
3-22	39	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
3-27	40	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
1420	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
420	西	2	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
3-32	43	西	5	半橫形	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.7		
30	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
3-20	46	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6
3-30	47	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6
50	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
3-16	506	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6
52	西	3	朝日式	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.7	
53	西	3	朝日式	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.7	
54	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
55	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
56	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
57	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
58	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
59	西	2	朝日式	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
61	西	3	朝日式	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
62	西	3	朝日式	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
63	西	3	朝日式	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
64	西	1	半橫形	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
67	西	4	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
69	西	3	朝日式	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
5-24	71	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6
72	西	1	半橫形	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
73	西	3	朝日式	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
77	西	5	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
80	西	3	朝日式	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
8-16	84	西	2	大盤足	沈燒、半橫形	口緣斜坡下	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	1.0	
86	西	3	朝日式	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
88	西	4	半橫形-沈燒、半橫形	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	1.2			
91	西	3	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃7-8	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.7		
93	西	4	綱文	圓盤	標記	標記7-7	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.7		
94	西	5	綱文	圓盤	標記	標記7-7	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.7		
95	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	標記	標記7-7	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.7	
96	西	3	朝日式	綱文	圓盤	標記	標記7-7	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.7	
99	西	3	綱文	圓盤	標記	標記7-7-標記7	白-AV-黃	白	灰	白-灰	1.1		
100	西	3	綱文	圓盤	標記	標記7-7	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6		
102	西	3	朝日式	綱目伏熱赤文	圓盤	標記	標記7-7	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
104+105	東	3	朝日式	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
106+106	東	3	朝日式	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	0.6	
1-28	106	東	3	朝日式	綱文	圓盤	標記	白-AV-黃10YR7-4	白-AV-黃	白	灰	白-灰	1.0

第2表-2 繩文土器觀察表(2)

図版	m.	地点	剖面	型式	文様表面	部位	縄目			施土	厚さ (cm)
							色調	赤	白		
107	東	3	朝日山	绳文	繩目	口縄目 黒10YR7.3	白・黒・透明	白	白	86	
108	水	2	朝日山	绳文	繩目	口縄目 黑10YR7.3	白・黒・透明	白	白	86	
5-3	195+82	東	1	木下林西れ文	繩目	口縄目 黑10YR7.3	白・黒・透明	白	白	82	
124	東	1	木下林西れ文	繩目	繩目	繩目 2SYR9-9	白	白	82		
126	東	1	木下林西れ文	繩目	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	89	
126	東	4	繩文?	繩目	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	89	
129	東	1	木下林西れ文	繩目	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	88	
134	東	5	繩文	繩目	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	89	
134	東	7	朝日山	繩文	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	89	
5-7	142	東	3	朝日山	繩文	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	86
142	東	1	繩文	繩目	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	86	
5-30	146	東	4	繩文	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	86	
351	東	4	繩文	繩目	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	86	
5-13	155	東	5	朝日山	繩目林西れ文	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	86	
5-14	155	東	2	朝日山	繩目林西れ文	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	86	
5-11	156	東	2	朝日山	繩目林西れ文	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	86	
317	東	3	朝日山	繩目林西れ文	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	10	
5-12	156	東	3	朝日山	繩目林西れ文	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	86	
169	東	2	朝日山	繩目林西れ文	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	86	
5-29	161	東	2	朝日山	繩目林西れ文	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	86	
5-1	166	東	2	朝日山	繩目林西れ文	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	86	
166	東	4	繩文	繩目	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	10	
372+173	東	1	北浦	縄文	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	11	
375	東	4	繩文	繩目	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	97	
177	東	2	朝日山	繩目林西れ文	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	67	
178	東	5	繩文	繩目	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	67	
178	東	7	朝日山	繩目林西れ文	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	67	
5-9	180	東	3	朝日山	繩目林西れ文	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	67	
184	東	1	朝日山	繩目林西れ文	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	67	
185	東	5	繩文	繩目	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	67	
186	東	4	繩文	繩目	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	67	
187	東	2	朝日山	繩文	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	67	
188	西	4	田舎	繩目	繩目	繩目 2SYR9-9	白・黒・透明	白	白	10	

第2表-3 石器観察表

図版	m.	地名	文様表面	剖面	石材	直径	最大幅	厚さ	重さ (kg)	参考
						直径	最大幅	厚さ		
137-5	東	道在	繩文	縄目	チャコ	24.1	27.2	6.9	9.26	
8-34	212+6	岩石	繩文	縄目	安山岩	4.08	8.80	4.63	307.12	
8-35	217+6	武	石	繩目	安山岩	19.17	14.49	2.41	1032.71	
8-37	217-8	武	石	繩目	繩目	7.71	11.43	1.33	(420.68)	無熟
8-33	213	東	石	繩目	繩目	30.07	30.95	14.64	1200.41	
9	西	石井	繩文	縄目	チャコ	2.85	3.24	1.16	9.32	
10	西	石井	繩文	縄目	チャコ	2.05	2.05	0.28	2.12	
7-43	26	西	石井	繩目	安山岩	15.00	15.00	3.00	88.02	1-147(2号・特徴有)
7-43	26	西	石井	繩目	安山岩	13.94	13.82	6.18	180.70	無熟
8-51	69	西	二次打上の丸棒	繩目	安山岩	7.13	7.72	1.32	82.87	
7-43	69	西	石井	繩目	安山岩	5.10	6.64	4.81	179.37	
20	西	石井	繩目	繩目	チャコ	30.45	4.95	2.72	209.20	
6-39	24	西	石井	繩目	無機質質安山岩	8.89	6.17	1.77	7.61	
7-40	49	西	石井	繩目	無機質質安山岩	8.89	2.65	3.00	98.83	
89	内	石井	繩目	繩目	門崎竹	2.86	4.17	2.20	27.63	
7-41	93	西	石井	繩目	門崎竹	9.66	8.68	1.00	47.87	
190	東	酒井	繩目	繩目	無機質質安山岩	3.03	2.96	1.09	7.42	
7-44	190	東	酒井	繩目	安山岩	12.30	7.59	5.63	717.16	化成物付着
112	東	酒井	繩目	繩目	安山岩	4.75	2.74	0.97	10.00	
113	東	酒井	繩目	繩目	無機質質安山岩	3.63	2.14	0.97	19.19	
6-37	113	東	酒井	繩目	安山岩	13.96	7.93	2.73	263.60	打製石刃部分の軽用
7-46	113	東	酒井	繩目	繩目	5.51	16.52	4.52	(172.35)	
119	東	酒井	繩目	繩目	無機質質安山岩	2.64	2.21	1.17	4.79	
127	東	酒井	繩目	繩目	繩目	1.77	4.09	0.28	2.77	
7-47	129	東	酒井	繩目	安山岩	11.95	13.54	4.17	96.05	灰化物付着
141	東	酒井	繩目	繩目	安山岩	3.07	8.00	0.73		
7-42	133	東	酒井	繩目	安山岩	13.96	14.49	9.94	213.51	
8-52	135	東	二箇山(小山)上	繩目	繩目	9.32	9.30	2.29	279.64	化成物付着
8-49	137	東	酒井	繩目	安山岩	16.69	(14.93)	(5.27)	(226.90)	無熟・化成物付着
136	東	酒井	繩目	繩目	安山岩	4.96	4.56	1.80	36.41	無熟・化成物付着
139	東	酒井	繩目	繩目	安山岩	3.13	3.13	1.92	18.74	
140	東	酒井	繩目	繩目	安山岩	2.53	3.03	1.67	17.69	
141	東	酒井	繩目	繩目	無機質質安山岩	2.08	1.95	0.82	1.65	
145	東	酒井	繩目	繩目	安山岩	7.46	5.46	1.93	85.23	
150	東	酒井	繩目	繩目	安山岩	6.11	3.99	3.04	94.78	化成物付着
8-48	154	東	石井	繩目	安山岩	14.09	(12.16)	(4.79)	(1213.19)	無熟・化成物付着
128	東	石井	繩目	繩目	安山岩	9.76	3.03	1.00	11.30	
161	東	石井	繩目	繩目	安山岩	15.21	16.04	0.90	18.68	無熟
163	東	石井	繩目	繩目	安山岩	7.45	3.14	2.92	77.95	
6-38	164	東	打製石井	繩目	無機質質安山岩	(4.83)	3.86	(2.16)	(766.41)	
165	東	石井	繩目	繩目	繩目	9.80	9.12	(4.03)	(193.31)	無熟・化成物付着
8-50	166	東	石井	繩目	安山岩	21.23	15.91	7.68	210.00	無熟・化成物付着
179	東	石井	繩目	繩目	安山岩	11.30	5.10	3.05	257.51	
179	東	石井	繩目	繩目	安山岩	10.50	5.00	2.84	22.30	
180	東	石井	繩目	繩目	無機質質安山岩	3.07	1.96	0.92	0.80	
180	東	石井	繩目	繩目	安山岩	2.23	2.85	1.08	(14.07)	
180	東	石井	繩目	繩目	無機質質安山岩	7.50	3.01	1.06	70.05	打製主要品?
6-36	192	東	大原(川口)上	繩目	無機質質安山岩					

## 第V章 まとめ

ここでは、前章までの記載事項を要約するとともに、本遺跡の性格について周辺遺跡の在り方を踏まえながら試論的に考察し、本報告書のまとめとする。考察を通して課題の一端を浮き彫りとし、地域誌構築への端緒としたい。

朝日原遺跡の形成時期は中期初頭・中期中葉・晩期中葉の3時期に大別できる<sup>11</sup>。各期に共通した特徴としては、出土土器の個体数が限定されるという在り方を指摘できる。調査区域が狭少で、また包含層上半が削平されていたこと、そして遺物の出土量すなわち廃棄量<sup>12</sup>が活動の寡多を直接反映している訳ではないこと、この3点を踏まえた上で敢えて解釈すると、発掘調査によって得られた土器群の出土状況からは、この遺跡が小規模かつ短期的な活動痕跡の集積であると理解できる。また、出土した石器群は磨石類・石皿類を主体として構成されており、ある程度の滯在性を窺い知ることができる。遺構は27基確認し、うち14基が柱穴状の土坑であった。土坑群に配列関係を見出すことはできなかったが、簡易的な居住施設に関するものと考えられる。地床炉と推測される遺構2基を確認したことも、この考えを追補するものであろう。

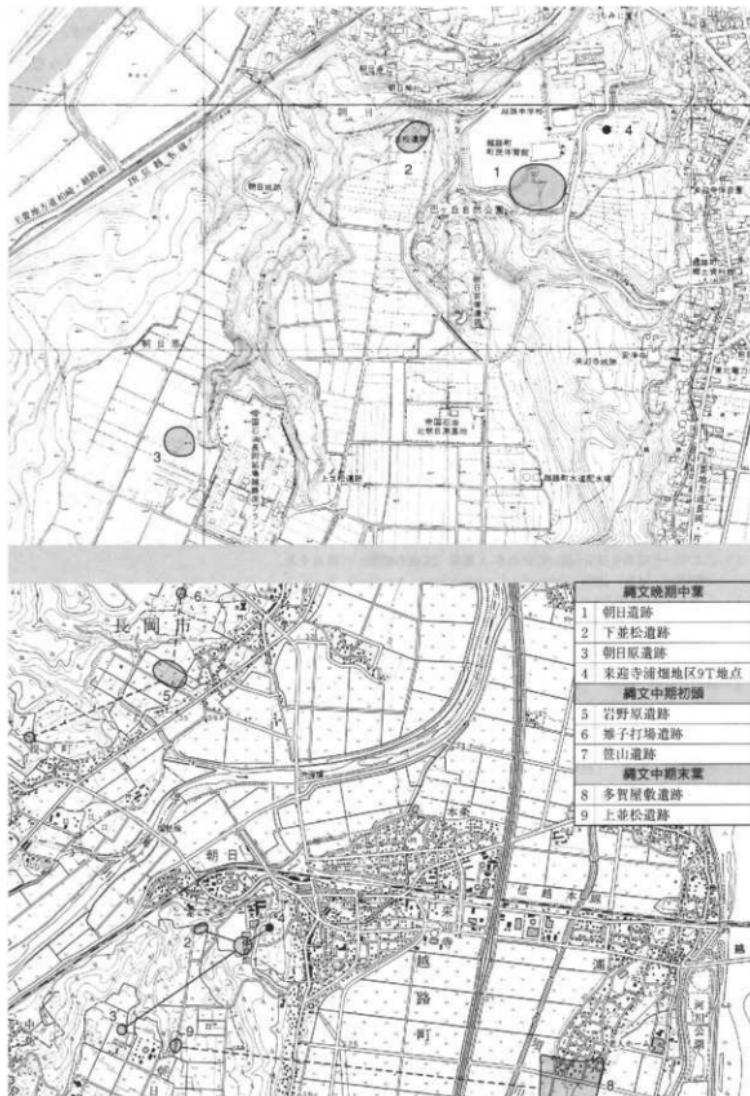
遺物・遺構の様相を総合すると、今回朝日原遺跡として把握された活動痕跡は、短期滞在的なキャンプ・サイトとしての在り方を示唆しており、佐々木高明が示した「定住村落型」モデル<sup>13</sup>に当てはめたとき、「移動キャンプ（field camp）」に位置づけられる。この場合、集落（residential base）となる活動痕跡の存在を用意する必要があろう。

前述した通り、朝日原遺跡で出土した晩期中葉資料は「朝日式土器」に含まれる粗製深鉢である。「朝日式土器」は文字通り朝日遺跡出土資料を嘴矢・標式とし、刈羽郡小国町の延命寺ヶ原遺跡住居床面一括資料に掲げて大洞C1式併行に比定されている<sup>14</sup>。近隣の遺跡を通観すると、《朝日式・大洞C1式》という考古学的共時性をもつ纏まりとして、朝日遺跡の他に下並松遺跡・来迎寺浦畠地区9T地点<sup>15</sup>が抽出される（第6図上段）。

朝日遺跡は大洞C1式～C2式併行期を主体とする遺跡である。1961年の発掘調査では、住居跡・土坑・環状配石・焼土の広がりなどか確認されているほか、多量の土器（中期初頭・後期中葉～晩期後葉）・石器（石鏃・石錐・打製石斧・磨製石斧・板状石器・磨石類・石皿・石錐など）・土製品（土偶・土製円板）・石製品（石棒・石劍・玉など）が得られており<sup>16</sup>、東西約150m・南北約100mの範囲に及ぶ拠点的な集落遺跡であつたと推測されている<sup>17</sup>。

下並松遺跡は古くから晩期遺物の採集地として知られていたとされる。その採集資料は神林昭一によって「石倉式および藤橋式」（大洞B式～A式併行？）に位置づけられている<sup>18</sup>。ただし、1967年に実施された発掘調査では時期不詳な縄文土器片が「きわめて稀薄散發的」に出土したに過ぎず、また遺構も確認されていない<sup>19</sup>。よって、発掘調査の成果を踏まえれば、下並松遺跡は遺物散布地ないし小規模集落であったと見做し得る。

来迎寺浦畠地区9T地点では、大洞C1式に対比されるであろう資料（壺型土器と推定される）が単体出土している。試掘調査という限定的な調査であることから、遺跡の性格についての詳細を決する事は出来ないものの、出土地点の立地（＝谷地形）と関連するトレンチでの調査成果から、極めて単発的な活動痕跡であることが推測される。



第6図 朝日遺跡を取り巻く晩期中葉の遺跡群と周辺地域における遺跡の関係性

以上の様に、当該期には朝日遺跡という拠点的集落を中心として、その周りに小規模遺跡が展開するという傾向が看取される。周辺地域において、中期中葉に馬高遺跡を取り巻くように同様の傾向があることは既に指摘されていることである<sup>10</sup>。中期初頭の岩野原遺跡を中心とした状況、更に中期末葉では、「上並松E群土器」<sup>11</sup>を鍵とした多賀屋敷遺跡と上並松遺跡との関係性を窺うことができるから、このような傾向はある程度一般的に認められるものであろう（第6図下段）。

今回残念ながら下並松遺跡出土資料を実見する機会をもち得なかつたが、朝日遺跡出土資料を軸として見た場合、管見の限り朝日原遺跡出土資料・来迎寺浦畠地区9T地点出土資料の土器胎土は近似するものと判断され、即断は避けるものの、広い意味で粘土を共有する関係にあったことを想定し得る。更に言えば、粘土や素地の選択性（嗜好性）、器面調整・焼成において同じ傾向をもつ一群として捉えることができよう<sup>12</sup>。そして、考古学的共時性において、これら遺跡群を有機的な関係体として把握するという見通しを立てておきたい<sup>13</sup>。朝日原遺跡はその一部を構成する活動痕跡であると推測される。

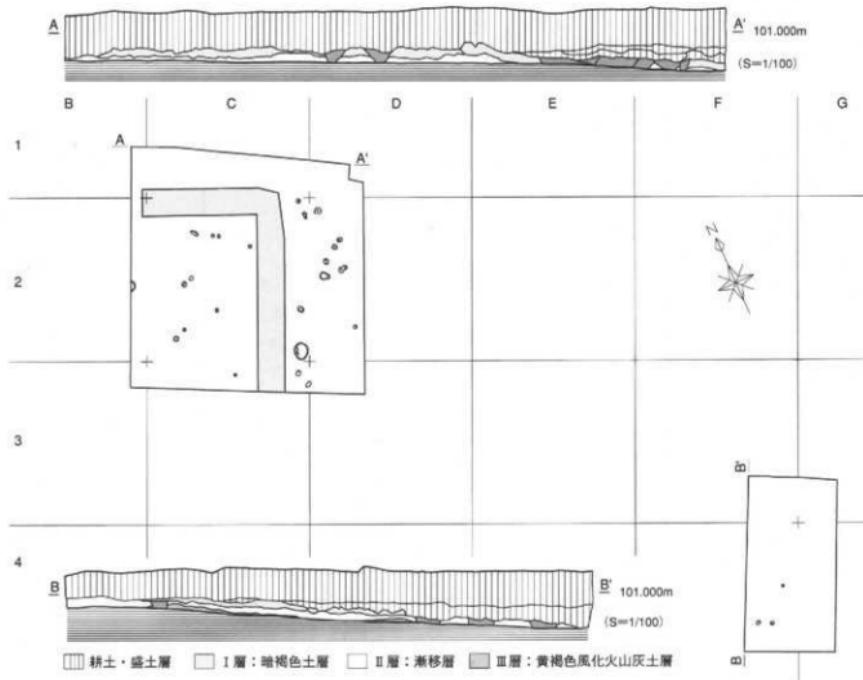
新潟平野と、そこに突出するように存在する「越路原」とでは、地理的要因において顕著とした差異があるにもかかわらず、中期末から晩期にかけての遺跡が大きな偏差なく残るという現象が看取される。これを地域誌として“物語らせる”ためには、遺跡群の機能的・有機的把握を積み上げる必要がある。

遺跡群の機能的把握は言うまでもなく遺跡の確認状況に左右される。このため地中に埋蔵されている遺跡の存在がその解釈に及ぼす影響は大きい。単なる埋蔵文化財保護のみならず、保護を生み出すための活用という見地に立ったとき、試掘調査や詳細分布調査が果たす役割はより大きいと言えよう。

- 1) ほぼ同一面での堆積状況が示されているため、これら時間差のある遺物を層位的に分離することはできない。
- 2) ここでいう廃棄とはSchiffer区分のS-A過程（広義の廃棄）に該当する。
- 3) このモデルはL.R.Binford（1980）による狩猟採集民の社会モデルを下敷とする。佐々木（1996）は、有名な「フォレジャー型（forager）」・「コレクター型（collector）」に、「定住村落型」を加えた分類モデルを明解に図示している。
- 4) 佐々木高明 1991 「日本の歴史」①日本史誕生 集英社。98頁。
- 5) L.R.Binford, 1976 *Behavioral archaeology*, Academic Press.
- 6) 佐々木高明 1996 「朝日原土器」大川清・鈴木公雄・工業普通編『日本土器事典』雄山閣。207頁。
- 7) 石川日出志 1996 「朝日原土器」大川清・鈴木公雄・工業普通編『日本土器事典』雄山閣。207頁。
- 8) 平成15年11～12月にかけての当該地区試掘調査によって新たに発見された遺物包蔵地であり、正式な遺跡名は現在検討中であるため、暫定的な地点名としたい。
- 9) 越路町教育委員会 1965 「越路町文化財調査報告書第1報 朝日遺跡」。
- 10) 小熊博史 1998 「朝日遺跡」越路町編「越路町史」資料編1。75～117頁。
- 11) 小林昭一 1965 「越路町及び周辺の遺跡」 註6、前掲書。36～41頁。
- 12) 越路町教育委員会 1970 「越路町文化財調査報告書第3報 越路原聯合調査報告書 朝日百塚・並松遺跡」。
- 13) 長岡市編 1992 「長岡市史」資料編1考古 長岡市。
- 14) 稲岡泰彰 1970 「土器」 註9前掲書。27～28頁。
- 15) 小林達雄 1989 「縄文土器の様式と型式と形式」小林達雄編『縄文土器大観』4 小学館。248～254頁。
- 16) 洪海川下流域には、延命寺ヶ原遺跡・朝日遺跡・藤橋遺跡というほぼ同時期に営まれた拠点的集落が確認されている。延命寺ヶ原遺跡と朝日遺跡は直線距離にして約14km離れている。これはsite catchment analysisの作業仮説に採用される狩猟採集民の生業圏規模（半径10km／徒歩2時間圏）に近い距離関係となっている。また、朝日遺跡と藤橋遺跡との直線距離は約3kmと近接している。この付近は洪海川が新潟平野に流入する地点であり、土層の堆積状況や、潜在植生（西山 2001）などからみて、両遺跡の間には洪海川の氾濫原が横たわっていたものと推測される。これが地形的壁障となって集落間の近接ストレスが緩和され、拠点的集落の凝聚を可能にしていったのだろう。

西山邦夫 2001 「遠い昔の越路町の自然」 越路町編「越路町史」通史編上巻。41～43頁。

図版1 遺構全体図 (S=1/300)



遺構観察表

番号	平面形*	規模(長径×短径cm)	断面形*	深さ(cm)	出土遺物	備考
P 1	円形	17.2 × 16.3	U字状	—	なし	
P 2	円形	35.3 × 31.8	U字状	23.1	なし	
P 3	円形	21.3 × 19.4	U字状	25.0	なし	
P 4	略楕円形	34.2 × 27.7	梯段状	27.5	なし	
P 5	略楕円形	27.5 × 21.2	台形状	20.3	なし	
P 6	円形	22.5 × 20.6	箱状	18.6	なし	
P 7	円形	26.5 × 22.5	U字状	32.0	なし	
P 8	不整形	44.1 × 24.1	古字状	14.2	なし	
P 9	不整円形	44.1 × 39.8	台形状	33.5	なし	
P 10	略楕円形	34.0 × 25.9	U字状	20.4	なし	
P 11	略円形	33.6 × 30.2	台形状	11.5	なし	
P 12	円形	35.5 × 31.3	梯段状	41.0	なし	
P 13	不整円形	61.7 × 42.0	台形状	12.9	なし	
P 14	円形	25.0 × 21.9	U字状	28.1	なし	
P 15	略楕円形	104.3 × 84.5	台形状	14.1	なし	
P 16	略楕円形	35.3 × 26.6	U字状	52.8	なし	
P 17	椭円形	(54.9 × 34.4)	U字状	31.5	なし	2 遺構切りあい。
P 19	略楕円形	23.0 × 17.5	箱状	18.7	なし	
P 20	円形	21.1 × 18.3	台形状	15.6	なし	
P 21	略楕円形	53.5 × 21.5	台形状	10.3	なし	
P 22	円形	20.5 × 19.7	箱状	12.6	なし	
P 23	略楕円形?	(66.5 × 27.3)	台形状	13.8	なし	
P 24	略楕円形	27.6 × 20.5	U字状	32.5	なし	
P 25	円形	23.5 × 20.7	U字状	29.7	なし	
P 26	円形	17.2 × 16.3	半円状	7.5	なし	
P 27	略楕円形	43.3 × 30.5	弧状	8.0	なし	地盤印か?
P 28	略楕円形	40.0 × 20.5	—	—	なし	地盤印か?

\*平面形・断面形の分類は、下記文献に準拠した。

加藤 学 1999 「遺構の形態分類」 加藤学編「新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 和泉入跡跡」(本文・観察表編) 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団。28~29頁。

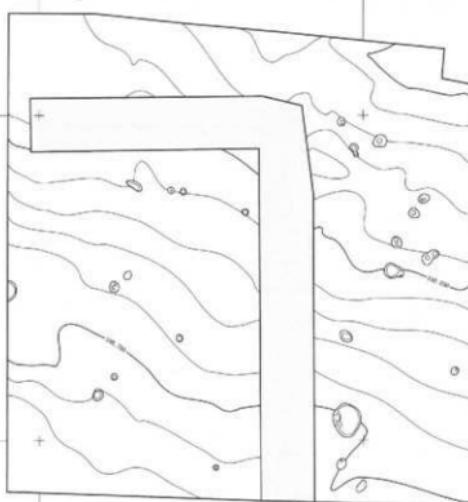
図版2 地点別遺構分布図 (S=1/150)

B

C

D

1



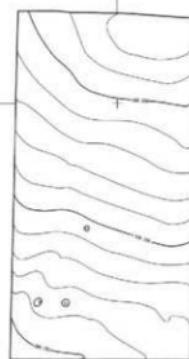
2

西側調査区 遺構分布図 (S=1/150)

F

G

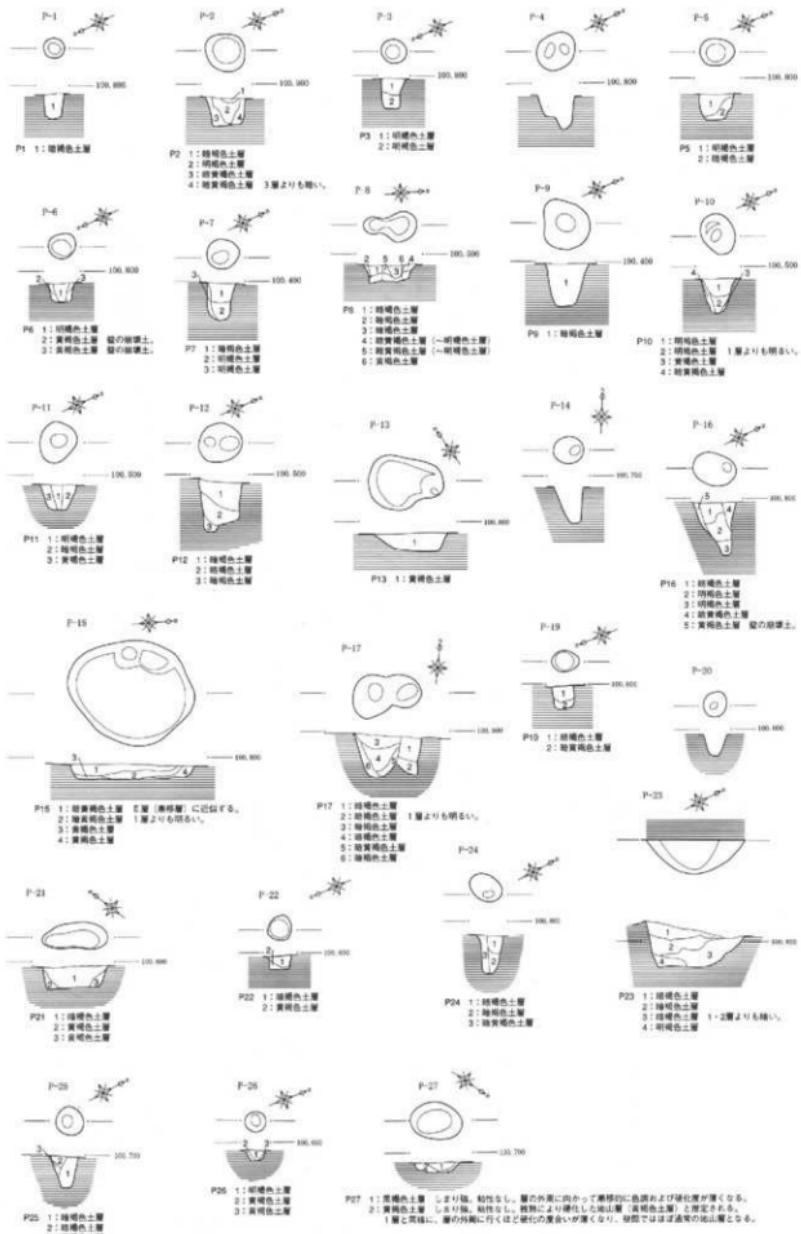
3



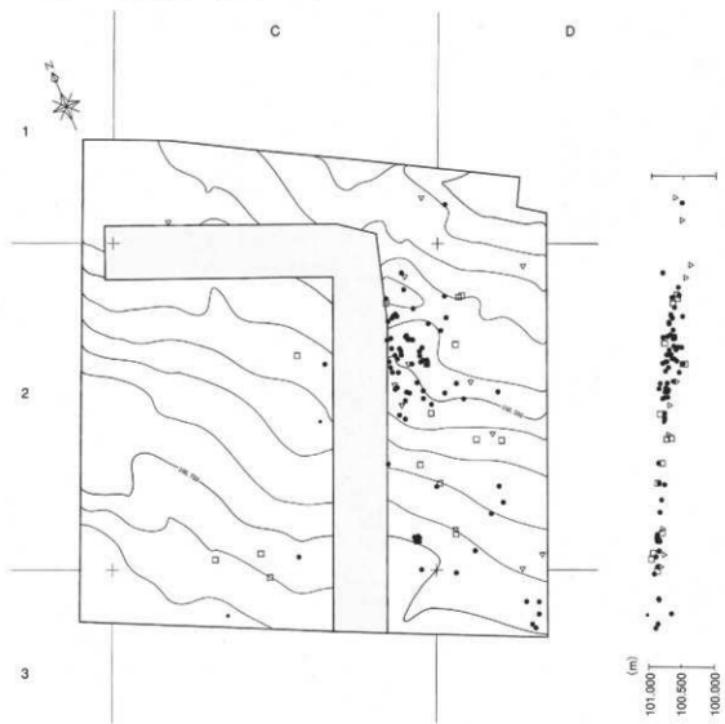
4

東側調査区 遺構分布図 (S=1/150)

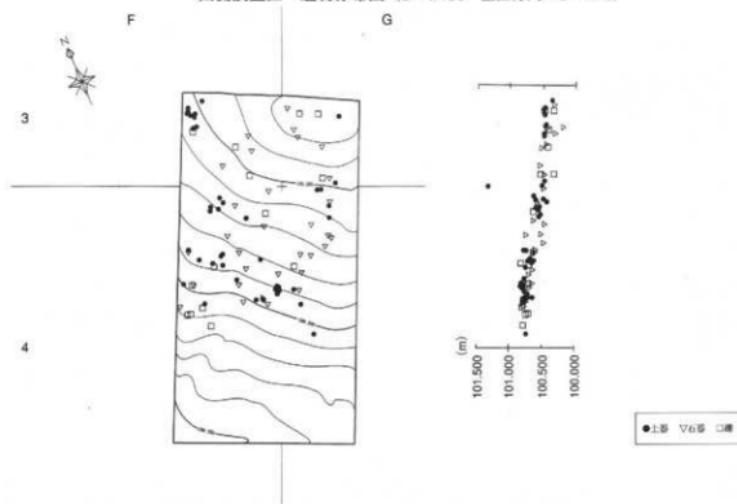
図版3 個別造構図 (S=1/40)



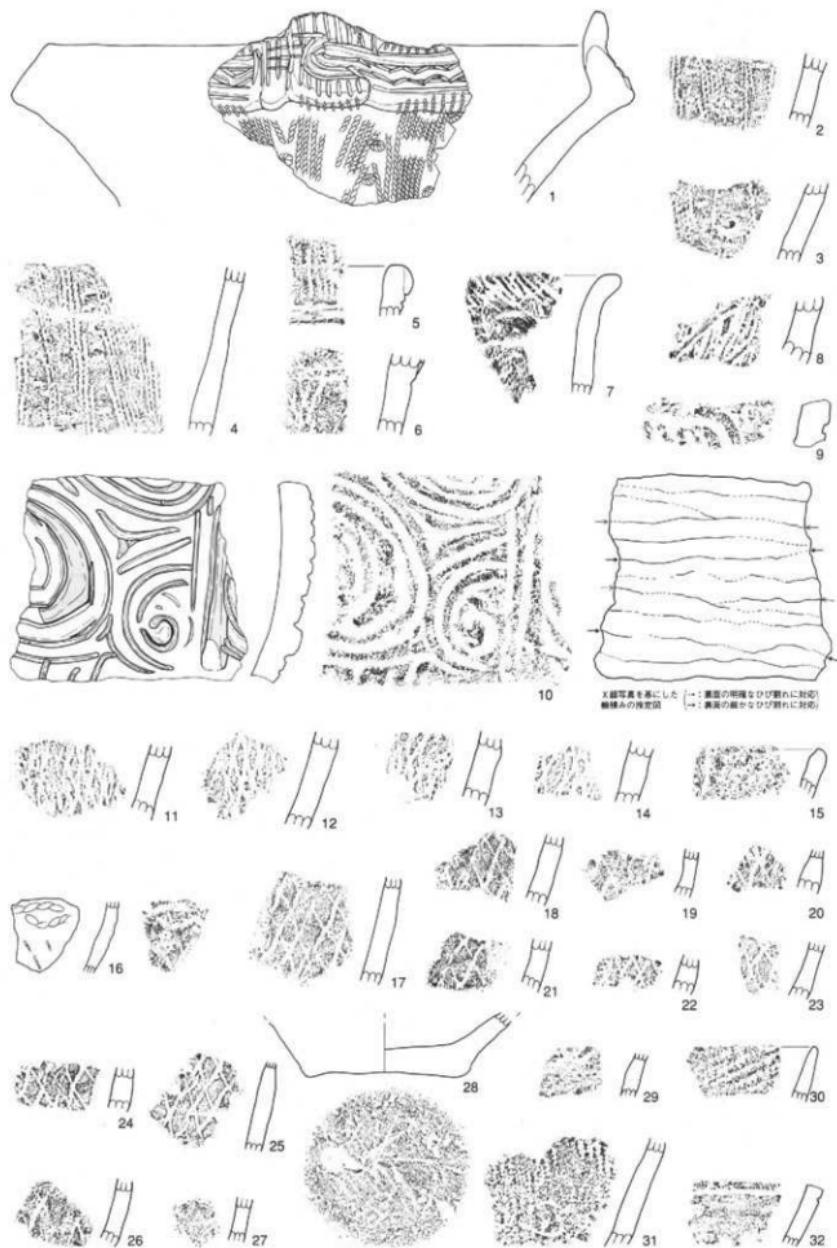
図版4 地点別遺物分布図 ( $S=150$ )

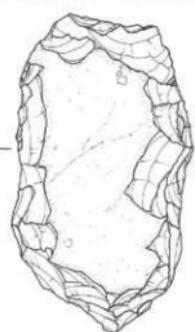
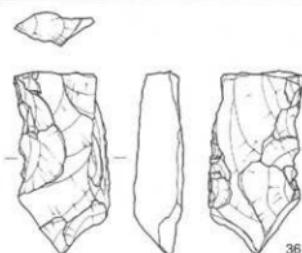
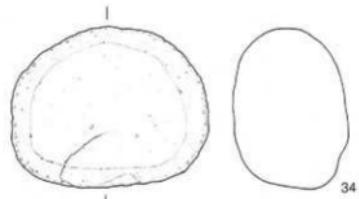
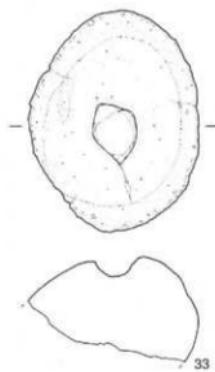


西侧調査区 遺物分布図 ( $S=1/150$  垂直方向  $S=1/75$ )

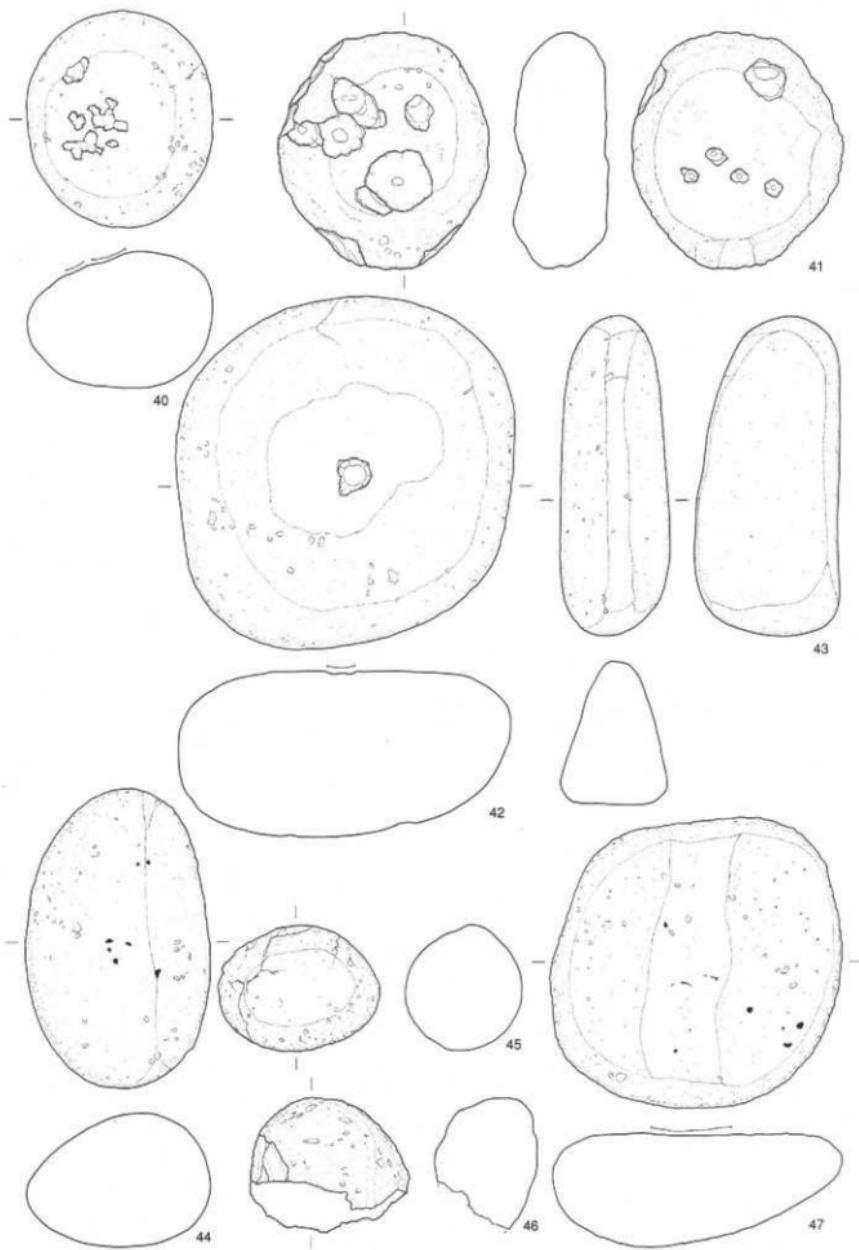


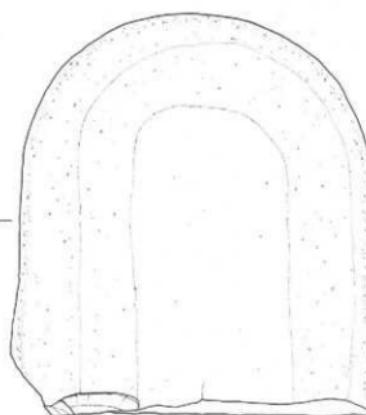
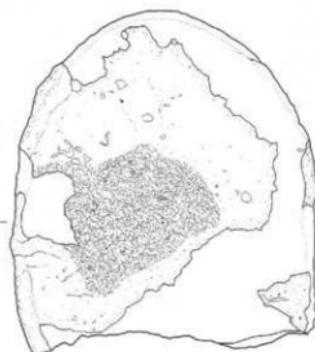
東側調査区 遺物分布図 ( $S=1/150$  垂直方向  $S=1/75$ )



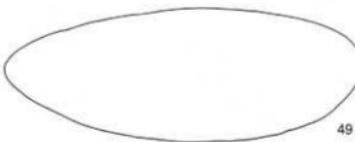


図版7 出土石器実測図2 (S=1/2)

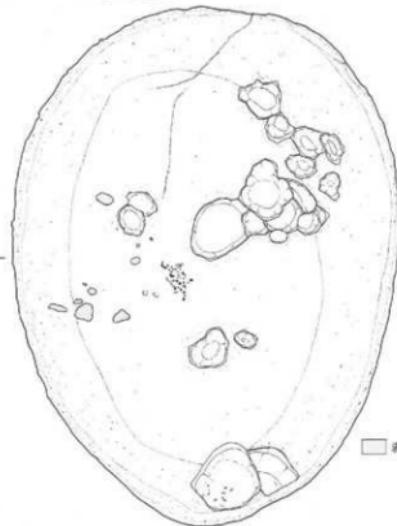




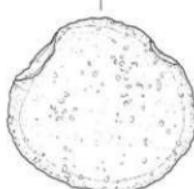
48



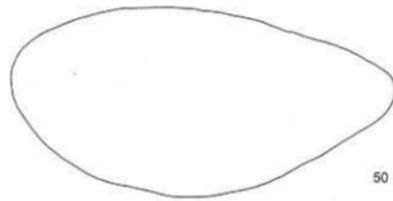
49



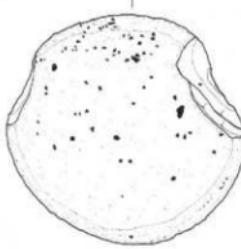
□ 赤色付着物



51



50



51



52



朝日町原遺跡遠景（東から）



調査区遠景（東から）



調査区から越路原プラント（中山遺跡）を望む（西から）



西侧調査区 完掘状況（西から）



東側調査区 完掘状況（西から）

写真図版 2



西侧調査区 南壁set（北から）



西侧調査区 遺物出土状況 1（西から）



西侧調査区 遺物出土状況 2（東から）



西侧調査区 火焰型土器出土状況（南から）



東側調査区 南壁set（北から）



東側調査区 遺物出土状況 1（北から）



東側調査区 遺物出土状況 2（南から）



東側調査区 土器出土状況（北から）

写真図版 3



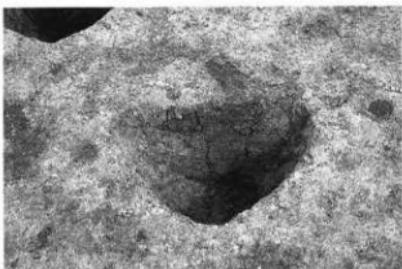
P2 半截状況（西から）



P6 半截状況（西から）



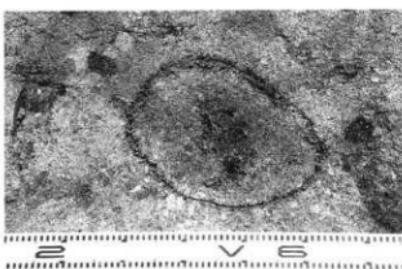
P7 半截状況（西から）



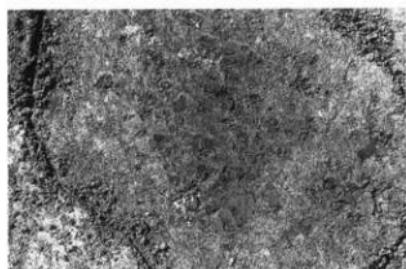
P11 半截状況（西から）



P16 半截状況（西から）



P27 確認状況 1（東から）



P27 確認状況 2（ZOOM）



P27 半截状況（東から）

写真図版 4



調査区表土剥ぎ



方眼杭設置状況



調査状況 1



調査状況 2



調査状況 3



遺物上げ作業

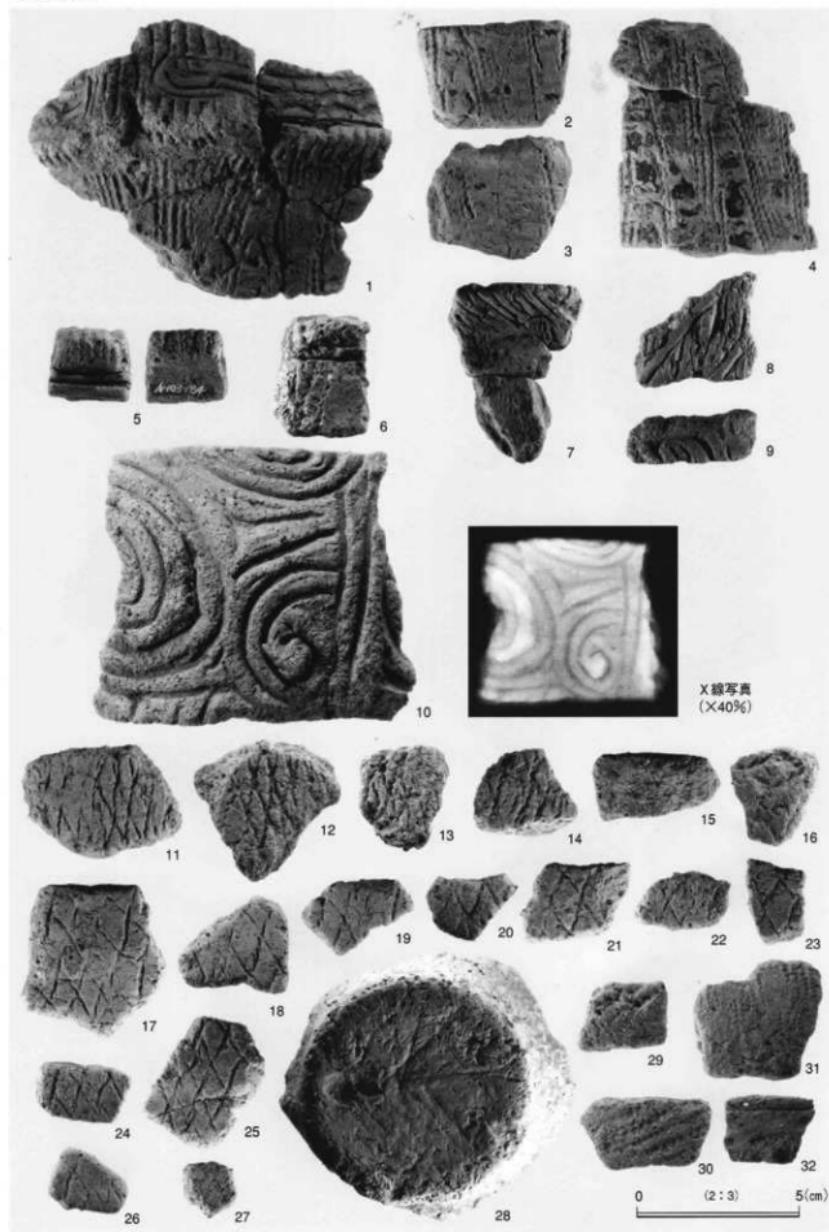


土層図作成作業

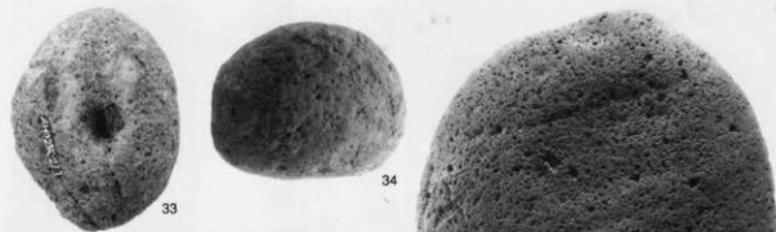


休憩状況

写真図版 5



写真図版 6



0 (1 : 2) 5(cm)

写真図版 7



45



46



47



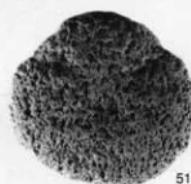
48



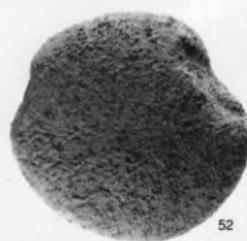
49



50



51



52

0 (1 : 2) 5(cm)

報告書抄録

ふりがな	あさひはらいせき							
書名	朝日原遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	越路町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第27輯							
編著者名	新田康則							
編集機関	越路町教育委員会							
所在地	〒949-5493 新潟県三島郡越路町大字浦715番地 TEL0258-92-5910							
発行年月日	2004年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
朝日原遺跡	新潟県三島郡 越路町大字朝日 字原187番地ほか	15-401	46	37° 23' 20"	138° 46' 02"	20030714 ~ 20030909	262.5m <sup>2</sup>	天然ガス処理 プラント増設 工事
所収遺跡名	種別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
朝日原遺跡	遺物包蔵地	縄文時代中期初頭・晩期中葉		土坑・地床炉		縄文土器・石器		なし

越路町文化財調査報告書第27輯

朝日原遺跡

平成16年3月25日 印刷

平成16年3月31日 発行

編集・発行 越路町教育委員会

新潟県三島郡越路町大字浦715番地

電話 0258(92)5910

印刷・製本 株第一印刷所

新潟県新潟市和合町2丁目4番18号

第一和合ビル内

電話 025(285)7161(代表)